

隆寛撰『知恩講私記』現代語試訳

【抄録】

法然の直弟子である隆寛の撰述にかかる『知恩講私記』は、法然滅後、月命日ごとに専修念仏の徒が、東山大谷の法然廟所において報恩のために修した法会の講式である。その中で作者は、法然の遺徳を、①諸宗通達徳、②本願興行徳、③専修正行徳、④決定往生徳、⑤滅後利物徳の五項目に亘って讃歎しているため、おのずからそれが現存最古の法然伝ともなっている。現代語訳が発表されていない現状に鑑み、試訳を行って、将来の総合的な研究のための資料としたいと思う。ただし、本文校訂と内容理解とは相互補完的な関係にあり、一方を欠いて他方のある道理がないからである。

キーワード…『知恩講私記』 隆寛 法然伝 現代語訳

隆寛撰『知恩講私記』現代語試訳（本庄良文）

本 庄 良 文

はじめに

法然の直弟子である隆寛の撰述にかかる『知恩講私記』は、法然滅後、月命日ごとに、専修念仏の徒が、東山大谷の法然の墓前において修した法会の講式である。その中で作者は、法然の徳を五項目に亘って讃歎しているため、おのずからそれが現存最古の法然伝ともなっている。左に示すのは、その現代語試訳である。底本は、櫛田良洪氏が初めて公表した安貞二年写本としたが、『真宗聖教全書』第五巻所収本を参照し、適宜に取捨選択した。本来ならば、諸本対照の原文、訓読を示すべきであるが、それは適任者に委ねることとしたい。

もともとこの試訳は、知恩院浄土宗学研究所における眞柄和人氏を囲む浄土教系漢文資料の輪読会で、平成二〇年ごろ、伊藤茂樹氏を担当者として『知恩講私記』を訓読したとき、個人的に用意したものである。その意味で、眞柄氏、伊藤氏および輪読会参加各位にお礼を申し上げねばならない。その後、平成二三年に伊藤正芳氏（京都市東山

区既成院)らが、本文に博士を付して折本の形で出版され(『知恩講私記 廣式』既成院)、知恩院の法然廟所で修された機会にこの試訳を見て頂き、それなりの手ごたえを感じたので、ここに公表する次第である。(翌年、浄土宗総合研究所の伝承儀礼班が、増上寺および知恩院勢至堂で、古式の知恩講を再現した。この点は、善裕昭〔2012c〕五七頁下参照。)

もとより試訳にすぎないが、本プロジェクトの「門下班」での研究のための、ひいては、法然仏教研究のための資料になればと願っている。幸い、門下班において伊藤茂樹班長のもと、法然門下の研究業績リストが作成されつつあり、さらに同氏がこの講式の諸本を蒐集している。諸本の校訂、訓読等を含む総合的な研究は、適任者に期待しつつ、今は試訳を示して最低限の注記を加えるにとどめ、関連論文についても、左にその一部のみ挙げることにする。詳しくは、それらの論文に示された参考資料を辿りたい。

梶田良洪〔1965〕「新発見の法然伝記―『知恩講私記』―」『日本歴史』二〇〇号、一九六五年。

伊藤唯真〔1965〕〔1996〕「古法然伝の成立史的考察―特に『知恩講私記』を繞って―」『法然上人伝の成立史的研究』第四巻、知恩院、昭和四〇年、再録・『浄土宗史の研究 伊藤唯真著作集IV』法蔵館、一九九六年、三一五九頁。(本稿での引用は後者で行う。)

伊藤唯真〔1981〕『「知恩講私記」の法然像』『浄土宗の成立と展開』吉川弘文館、昭和五十六年、第四章第一節、一九八一―二二九頁。

善 裕昭〔2012a〕「法然上人伝の誕生 2 『知恩講私記』I―復元された古い伝記―」『宗報』浄土宗、平成二四年三月号、四二―四五頁。

善 裕昭〔2012b〕「法然上人伝の誕生 3 『知恩講私記』II―作者と成立時期―」『宗報』浄土宗、平成二四年三月号、三八―四一頁。

善 裕昭〔2012c〕「法然上人伝の誕生 4 『知恩講私記』III―廟堂で読まれた伝記―」『宗報』浄土宗、平成二四年四月号、五四―五七頁。

現代語試訳

知恩講私記

先に〔仏・法・僧に〕礼拝〔都合〕三度^①

如来唄 通常通り^②

次に表白

敬つて無量寿仏、観音菩薩、勢至菩薩や、念仏を広められた今は亡き多くの方々^③に申し上げる。西方極楽に生れるための教えは、五つの汚濁に満ちたこの悪世における明眼であり、南無阿弥陀仏の修行は、われわれが直ちに往生することのできる主要な道である。ここに先師法然上人は、この教えを弘通し、この修行を勧奨された。出家・在家ともこぞつて帰依したことは草が風に靡くようであり、^⑤これを信じ、

これを仰げば、その報いは必ずあらたかである。この教化のはたらきは上人の在世に止まらず、その利益は滅後にいよいよ盛んである。その恩は山よりも高く、その徳は海よりも深い。⁽⁶⁾何万劫、何億劫かけてもその恩に報いることは困難である。つねに念仏を称えて上人の本懐に適うに勝ることはあるまい。⁽⁷⁾今ここで上人の五つの美德をほめたたえ、出家・在家の仏教徒に「専修念仏を」勧進したい。往生のための正行はただこの念仏の一事にかかっている。誓って一生を終えるまで、暫くの間も止めるようなことがあつてはならない。

第一に諸宗に通じておられた美德を讀めるならば――

上人は出家以前の姓は漆間氏、美作国の人である。生年十五歳の春、初めて比叡山に登り、同じ年の仲冬に、戒壇に登って受戒された。天台宗を習学して歲月もさほど経たないうちに、つぶさにその文言と意味とに通じ、立派な先輩方をほとんど圧倒するほどであつた。十八歳の秋、名誉と利得とを遁れて黒谷に居住され、それ以来、一切の經・律・論の三蔵を鑽仰しては眠ることも忘れ、自宗・他宗の章疏を紐解いては倦むことがなかつた。この他にも日本・中国両朝の伝記類といい、古今の学者の秘書といい、手に触れないものはなく、心に思ひ浮かべないものはなかつた。⁽¹⁾南都六宗の碩学を訪ねてはいちいちに教義の筋道を議論し、諸宗の奥義を探つてはそれぞれに印可を蒙られた。世を挙げて「智慧第一法然房」と褒めたたえたのである。もつともなことであり、当然のことである。とりわけ天台円頓菩薩大乘戒については、戒の本体も戒の儀式も一身にこれを正しく継承しておられ

た。そのため 天皇を初めとして日本国中の人々が貴賤を問わず、伝戒の師とし、崇敬・尊重することには並々ならぬものがあつた。

およそ顕教・密教の修行において鍛錬して力を尽されたのは名譽のためでも利得のためでもなく、ただ仏道を完成するためであつた。そのゆえに郷里美作のすぐれた師匠觀覺も却つて弟子となられ、黒谷の尊い師匠叡空も強いて軌範師とし、興福寺（法相宗）の藏俊は仏陀かと誉めて生涯供養を行い、東大寺（華嚴宗）の重鎮慶賢は戒和尚として上人から円頓戒を受けた。

智慧や理解力が抜群であるゆえに、この上なく尊び重んずるに足るお方である。そもそも「ひろく」釈尊一代の教えに通じながら、阿弥陀仏の念仏往生の本願に限つて帰依されたのも、濁世のひとびとを憐れみ、智慧乏しく悪業深重なるわれわれを救うためである。もし自分勝手な教義を立て、思いあがつた人があつて、覺りを得るもろもろの教えを滅ぼそうとし、浄土宗の正行である念仏を乱すならば、明らかに先師法然上人の誠めに背いている。けつして依用してはならない。我が身の分際を顧みて修行の道を決定する、これが最も肝要である。謹んで遺訓を守り、偏見に拘るようなことがあつてはならない。

一切の如来は衆生済度の巧みな手立てを講じられる。

それはまたわが釈迦牟尼世尊も同じこと。

相手の人柄・能力に合せて説法されるので、みな利益を蒙り、それぞれに真実の悟りへの門を理解し、「そこに」入ることができる。⁽¹²⁾

第二に本願興行の徳を讃えるならば――

西方極楽の教文は多くの宗でこれを愛玩している。そのうち天台、華嚴、三論、法相〔の諸師〕も、みな章疏を著作し、經文を解釈しているが、おのおの自分の属する宗の教義と矛盾しない解釈を取り、とりあえずは本願の趣旨を覆い隠している。これはすなわち権者の巧みさであり、時機尚早であることを弁えての仮の方法である。ところが、枝葉末節を学ぶのみで、表面をなぞるような学問をしただけの輩が、思い上って自分勝手な解釈を行っている。「自分だけが正しく、他はすべて誤っている」などと思ひ込むとすれば罪を遁れ難いものではないか。龍樹の『大智度論』〔の詩節〕に

自分の教義に執着するあまり、

他者の教義を否定する者は、

たとえ戒を保つ行者であっても、

地獄の苦しみを免れない。

とある。この警告は極めて重大である。まことに恐るべきである。

さて中国では曇鸞・道綽・善導・懷感が、わが国では空也・源信・永観・珍海が、専ら阿弥陀仏に救いを求め、ひたすら念仏を勧められた。ところが学者たちは聖道門・浄土門について難行であるか易行であるかに拘泥し、行者たちは自力か他力かの議論に踏みとどまっている。

先師法然上人が、苦心の末に往生の肝要な教行を追求められたところ、恵心僧都が、心ひそかに善導を模範としておられることが判明した¹⁶。このことから上人が自ら言われるには、「善導は阿弥陀仏の化

身である。この『観經疏』は阿弥陀仏の直説であると言うことができる。現に〔疏の本文には〕「この疏を書写しようと思うものは、ひたすら〔仏の説かれた〕經典の教えと見なすべきである」と。この言葉はまことにその通りである。¹⁷「私は昔」この疏を披見してほぼその主旨を理解し、すぐさま他の修行を捨てて弥陀に帰依することとなった。自ら修行するのも、他に勧めるのも、ただ念仏のみである。¹⁸「そこで、たまたま」覺りの向う岸への渡し場を問うものがあれば、西方極楽への往生の教えを示し、〔まれに〕行法を求める者には、特に念仏の一行を教示した。信じる者は多く、不信の者は少なかった¹⁹。今、世間を見渡してみると、ここに述べられた事柄はまさにその通りであり、上人が尋常の人でないことが解るのである。これにより、ある人は阿弥陀仏の化身であると言い、ある人はまた勢至菩薩の垂迹であると言い、またある人は道綽の来現と言い、ある人はまた善導の再誕と言った。これらにはみな夢のお告げがあり、まのあたりに証拠が実見されたものばかりである。

謹んで考えてみるに、阿弥陀如来と勢至菩薩とは、別のものでありながらまた別のものではない。道綽禪師と善導和尚とも、ひとつでありながらまたひとつでない。ただしこれは人々の能力・性向に応じてのことであり、正法・像法・末法の時代を弁えてのことである。智慧をもつて人々をお救いになる。まさに知るべきである。善導和尚の、仏によつて証明を受け、階定されたという『観經疏』はまさしく浄土宗の濫觴であり、源空上人の『選択集』は他力の法門の指南であると。各自、一心に合掌して、「先師が」浄土宗を盛んにされた徳を褒め称

えよ。

詩節にいう。

あまねく有縁の、同行の人に勧める。

心を専らにして直ちに念仏の道に入り

疑念を起してはならない。

ひとたび阿弥陀仏の安楽国に至ったならば

もとよりそこは我らが教法の王の住処である。⁽²⁰⁾

南無、尊び重んじつつ先師源空上人の聖霊を讃歎したてまつる。

第三に、専ら正行を修した徳を誉めるならば――

念仏を行ずる人は多いが、専ら念仏を修する人は甚だ稀である。ある人は自力を主眼として空しく多くの修行をすることに疲れ果て、ある人は慢心を専らにして好むがままに〔浄土教以外の〕諸の教えを軽んじる。邪な悪魔に付け込む隙を与えてしまうのは、これがためではなからうか。〔そのようにしては、〕幾千万人が極楽往生を求めても、望みを叶える人は一人二人もない。

ここに先師源空上人は、聖道門を捨てて浄土門に入り、難行道を離れて易行道に向い、自力の心がけを改めて他力の本願に帰依された。六時の礼讃によつては多年に亘つて功を積み、別時の念仏によつてはどれほどの徳を重ねられたことであらうか。時間ごとの欣求浄土は百千回、日ごとの称名念仏は七万回。阿弥陀仏の願力が不可思議であるゆえに、初めには常に宝樹・宝宮殿を見、仏の力が不可思議であるゆえに、後にはまのあたり化仏・化菩薩を拝することができた。暗夜に

も灯火がないのに光が照らして昼のごとくであり、室の内外を見ることはあたかも明鏡に向うごとくであった。⁽²¹⁾ 口称念仏の力によつてこの身このままで往生の証拠を感得されたことは善導大師に等しく、懷感禪師とも変わりがなかった。一向称名の功績以外の何物であらうか。まことにこれは専修念仏の功德である。その修行が本願に順応したものであり、その勤めが仏の御意に適っていたことの驗はこれであり、証拠はこれである。いよいよ信心を堅固にし、尊敬の心を緩めてはならない。

詩節にいう。

観経・阿弥陀経等の説は、

すなわち頓教であり、菩薩藏である。

一日乃至七日、専ら念仏を唱えれば、

命の尽きるとき、須臾の間に極楽に往生する。⁽²²⁾

南無、心をこめて先師の聖霊を讃歎したてまつる。

第四に、決定往生の徳を明かすならば――⁽²³⁾

詳しく旧い伝記を考察するに、多くの瑞相を記載している。けれども上人の種々の霊異も、さまざまな奇瑞も、人々は口伝にも伝えており、世の人々がみな知るところである。まだ墓所を構えていなかった時に、二三の人々が、まさにその場所で天の童子が行進し、蓮の花が開くのを夢に見た。亡くなる三四年前以降は、聴力・視力ともに衰えたが、入滅の時に近づくと、明瞭に音も聞こえ色形も見えるようになった。

ある人が問うて言った。「このたびの往生は定まっていますか」と。上人はお答えになった。「かの浄土はわたしの本国であります。必ず還り行くであります」と。(しかも)「観音・勢至等の聖衆がおいでになって眼前におられる」とご教示下さった。「紫雲がたなびいています」と申し上げると、述べたまうには、「わたくしの往生は、もろもろの衆生のためであります」と。また臨終には三昼夜の間、あるときには一時、またあるときには半時、声高らかに念仏された。これを聞いて驚かない者はなかった。

正月二十四日の酉の刻以降、称名念仏に身を責めて間を置かず、また余事を交えなかった。傍らで助音する人が疲れているのに、老齢の病者(法然上人)が勇猛であり、声を絶やさなかった。未曾有のことである。翌日に往生されるであろうとの夢のお告げにより、驚き来集して終焉に間に合った者は五六人あまりである。

臨終のときには四句の文をお唱えになった。「光明遍照、十方世界、念仏衆生、摂取不捨」という『観無量寿経』の文がそれである。一人の殿上人があった。七八年前の夢に、上人が臨終にこの经文をお唱えになると見た。昔の夢と今の事実とが符号している。一体だれが上人に帰依せず、信じないことがあるのか。慈覚大師の九条の袈裟を身に付け、頭北面西の姿勢で、眠るがごとくに入滅された。念仏の声が止んでのち、なお十余回、口唇を動かされた。顔色は特に鮮やかであり、温容は微笑んでいるようであった。時に建暦二年正月二十五日、正午のことである。齢八十歳、釈尊の在世と同じである。およそ往生の奇瑞は引き続き、いちいちに述べる暇がない。おのおの至情の思いを凝

らして、同じ浄土の縁を望むがよい。

詩節にいう。

一々の光明は絶えることなく(十方を)照らすけれども、念仏往生の人を(選んで)照らし求めるのである。

十方の諸仏国と比べようとした場合、

極楽に身を安んずることは、実にこれ精妙この上ない。²⁴⁾

南無、丁重に先師聖霊を讃歎したてまつる。

第五に、滅後にも人々を利益される徳について言えば――

〔通常は〕寿命が尽き、魂が身体を去ると、空しくその人の名が残るのみである。本人のため、他人のために、いかなる利益をもたらずであろうか。

ところが先師法然上人は、浄土の宗義について、凡夫が直ちに極楽に往生できる道筋を示し、選択本願を明らかにして、念仏行者の手本とされた。その余徳は没後においてもますます盛んであり、遺徳は在世と等しく、変わるところがない。朝野・遠近を問わず、同じように七宝国土の月を願望し、貴賤・男女の区別なく、ともに梅檀の林を通う風を欣求する。ゆえにある人は紫雲に乗り、またある人は蓮の台に坐し、ある人は珍しい香りをかぎ、またある人は光明を見、ある人は化仏を拝み、またある人は聖者の群れに交わり、とこしなえにこの娑婆世界を遁れて、たちまちのうちに浄土に往生した。眼に見、耳に聞く〔往生人の奇瑞は〕目を覆い、耳を満たす。流れを汲み、源を尋ねるならば、〔みな〕偏に先師法然上人の恩徳である。そのゆえに、御

廟に参詣して「みずからの」往生を祈り、御影に礼拝して禪師上人を恋慕するひとびとは、友を誘い、群れを成して、夜を昼に継いでいる。とりわけ毎年正月二十五日、毎月二十五日に群集が袖を連れ、肩を接するありさまは、盛んな市に異ならない。時機相応の遺誠の、勝れた利益が广大であるからこそである、明らかに知られるのである。四方に住む遠くの人々でさえこの通りである。まして訓戒を直接に受けた門弟は言うまでもない。父母の恩を思うように、先師上人の徳を忘れてはならない。

詩節にいう。

どうしてこの時節に、宝の国に至ることを期待できるか。

実にこれは、娑婆世界に出現した、先師法然上人の力によるのである。

もし「真の」善知識である先師法然上人の勧めがなかったならば、どうして阿弥陀仏の浄土に往生することができようか。

南無、心を致して先師法然上人の聖霊を讃歎したてまつる。

六種廻向、通常の通りである。^②

註

(1) 自帰依仏、当願衆生（、体解大道、発無上意）。自帰依法、当願衆生（、深入経蔵、智慧如海）。自帰依僧、当願衆生（、統理大衆、一切無礙）。

(2) 如来妙（色身）、世間（無与等、無比不思議、是故今敬礼。）如来色

（無尽、智慧亦復然、）一切法常住、是故我帰依。

(3) 「今は亡き多くの方々」の原語は「聖霊」。亡き法然を「聖霊」という例が『明義進行集』巻二、静遍の項（大谷大学文学史研究会編『明義進行集』法蔵館、二〇〇一年、一〇六頁九行）にある。『九卷伝』『浄土宗全書』、巻十七、二二三頁下）、『四十八卷伝』巻四十（『浄土宗全書』、第十六卷、五八二頁上）はこれを依用する。

(4) 原文「要路」。平基親による『選択集』序文に「夫以専称南謨之教文者直至西刹之要路也」とある。『浄土宗全書』第七卷、一頁参照。

(5) 『論語』顔淵に「君子之徳風也、小人之徳草也、草上之風必偃」とある。

(6) 源智造立願文に同様の表現のあることは伊藤唯真が指摘している。

(7) 「しかじ、くには」の表現は、定型句。『四十八卷伝』巻一「しかじはやく俗をのがれ家を出て我菩提をとぶらひ、みづからの解脱を求めん」とある。『浄土宗全書』十六、一一六頁下参照。

(8) 原文「文義」。文言と意味。

(9) 「名利」は、阿含經典から頻出する語。原語では「利得と名声 (līhasakka)」の順序である。

(10) 「章」は独立の書、「疏」は注釈書。

(11) 『四十八卷伝』巻四に、「上人黒谷に蟄居の後。偏に名利をすて一向に出要をもとむる心切なり。これによりていづれの道よりかこのたびたしかに生死をはなるべきといふことをあきらめんために一切經を披閱すること數遍にをよび、自他宗の章疏眼にあてずといふことなし。惠解天然にしてその義理を通達す」とある。『浄土宗全書』第十六卷、一三二頁上参照。また、「せめては録内の經教をだにもきかずみず、いかにいはんや録の外の經教を見ざる人の、智恵有りがほに申すは、ゐのうちのかへるに似たり。随分に震旦日本の聖教を取あつめてひらきかんかへて候に」（『浄土宗全書』第九卷、五三五頁下）云々との法然自身の言葉もある。

- (12) 『般舟讃』の引用。『浄土宗全書』第四卷、五三五頁下。
- (13) 原文「暫」であるが、「且く」の意味で解釈する。
- (14) 原文「末学膚受」。法然『往生要集釈』に「末学稟膚」の用例がある。『昭法全』十八頁十二行。
- (15) 『大智度論』(T.1506)卷一、大正蔵第二五卷六三頁下四一五行。
- (16) 「秘懷善導為規模」とは、文言上はともかく、恵心の真意として、善導を模範・手本とする、の意であろう。法然が『往生要集釈』末尾の私釈(『昭法全』二六頁)に、「恵心を用いるの輩は、必ず道緯・善導に帰すべし」とする立場に基本的に合致する。
- (17) 善導が、自身の著作を經典と同じように見よと説くのは、自分が阿弥陀仏であることを示唆するものである、との趣旨。
- (18) 原文に「弥陀」とあるが、『選択集』諸本では「念仏」となっている。『昭法全』三四九頁。
- (19) 『選択集』の引用。『昭法全』三四九—三五〇頁。
- (20) 『般舟讃』の引用。『浄土宗全書』第四卷、五三五頁下。
- (21) 三昧発得や奇瑞については、伊藤唯真〔1996〕四七頁。
- (22) 『般舟讃』の引用。『浄土宗全書』第四卷、五三〇頁上。
- (23) 法然の臨終の記事については、伊藤唯真〔1996〕二〇—三九頁に、詳しく諸資料との対比がなされている。
- (24) 『般舟讃』の引用。『浄土宗全書』第四卷、五三〇頁下。
- (25) 源信『普賢講作法』における六種廻向文は以下の通り(中御門敬教氏の教示にあずかった)。

供養浄陀羅尼一切誦、敬礼常住三宝、敬礼一切三宝、我今帰依、
 釈迦弥陀、普賢大士、今日所献、香華供具、三業礼拝、恭敬供養、
 大慈大悲、哀愍摂受、願於生生、以一切種、上(浄)妙供具、供
 養無量、無辺三宝、自他同証、無上菩提、所修功德、回向自他法
 界、一切衆生、平等利益、滅罪生善、共生極樂、見仏聞法、悟無
 生忍、普賢行願、速疾円満、自他同証、無上菩提、尽未来際、利

益群生、廻施法界、回向大菩提。

中御門敬教「楞嚴院僧源信の華嚴浄土義『普賢講作法』—『往生要集』との接点—」『浄土宗学研究』第三十三號、平成十八年度、二〇〇六年、注二五五参照。

(ほんじょう よしふみ 研究員、仏教学部教授)